

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百六十回 マルクス・レーニン思想の破綻（その十）

南出喜久治（令和7年1月15日記す）

【マルクス主義の本質 その6】

闘ふ経済学者であつた宇澤弘文の「社会的共通資本」といふ考へがある。

しかし、宇澤は、共産主義にシンパシーを感じながらも共産主義批判をして、資本主義を擁護しながらも、資本主義がもたらす害悪の吹き出した事件について反骨を貫いた姿勢は評価できる。しかし、公共物もまた「資本」といふ言葉で表現することからしても、資本主義の軌道修正はできなかつた。

宇澤が描いたものは、我が国の明山（あきやま）、入会（いりあひ）と共通するものがある。しかし、我が国には、もっと進んだものがあつた。

明山、入会のやうな人間中心主義を排した、留山（とめやま）といふ生態系保護の考へすらあつたのである。

明山や入会は、共同利用ができる村落共同体の附属地であり、このやうなものは、中世ヨーロッパでも Common（共有地）として存在してゐた。

それは、実は、祭祀のためのものであつたが、いまはそのやうな観念自体が忘れ去られやうとしてゐる。

ちなみに、支那では、流刑地として、王朝の治安維持の目的により、特定の山林湖沢などを民衆の立入り禁止区域（封禁）と指定した「禁山」があり、そこは、王朝の治世を逃れた流民の逃避場所として、王朝打倒の闘争の拠点もあつた。この通信の名前の由来はここにある。

ともあれ、明山や入会といふのは、燃料として枯れ草や芝や薪などを取りに行くといふ場所ではなく、それをしてことによつて祭祀の場を清浄に保つて祭祀を斎行することができるやうにするのである。沖縄の御嶽（うたき）は、まさに祭祀を行ふ施設としての入会地なのである。

テンニースは、社会の共同生活の類型として、ゲマインシャフト（共同社会）とゲゼルシャフト（利益社会）とに区分した。前者は、地縁、血縁、精神的連帶などによつて自然

発生的に形成した集団であり、後者は、各自の利害得失の関心に基づいて形成された集団のことである。

これもまた唯物論的思考であるものの、前者は、明山や入会と親和性がある。しかし、精神的連帯といふのは、これは、つまるところ祭祀のことなのであるが、テンニースもまた古代ゲルマン人が持つてゐた祭祀の心を理解することができなかつたのである。

資本主義は、囮ひ込みによつて、入会を生産手段として取得して、商品生産のために入会地を破壊したことをマルクスは批判するが、単なる共有地が破壊されたといふのではなく、その場所での祭祀が失はれたことが本来は最も重大な問題なのである。唯物論で観察するために、村落の共有地が資本家の私有地になつたとしか認識できないのである。

では、資本主義を克服するための解決策はあるのか。これが提示できなければマルクスと同じ批判を受けるだけの分析評論家で終はつてしまふ。

国際血盟団運動を提唱しただけでは解決しない。かと言つて、資本主義を根絶するための壮大な政治の基本計画を説いても実現不可能である。

では、どうするのか。

それは、祭祀の道の復興のために支障となるすべての事象を一つづつ改善して行くことである。それには、政治の力が必要となるが、個々に行へることが多い。

食料自給率、エネルギー自給率を個々の家族単位、地域単位で向上させることであり、それは祭祀を実践すれば必然的に身に付いてくるのである。それ以外のこともすべて祭祀が起点となつて改善できる。祭祀には、そのやうな偉大な力がある。

我々の世界が、唯物論のみで語られるのではなく、人間の正しい生業の支柱となる祭祀斎行を基軸とすれば、祭祀復興により経世済民が実現して、資本主義を克服することができるるのである。